

次号予告

とびら..... 愛知医大 古川 良三

特集＝第9回日本理学療法士学会

一般演題まとめ.....

中原養護学校 一柳 勝治
大阪府立盲学校 西本 東彦
洞爺リハセンター 佐々木 昇
北村山公立病院 駒沢 治夫
阪大病院 浅野 達雄
パネルディスカッション「リハビリテーション工学」... 労災義肢センター 土屋 和夫
クリニカルカンファランス「腰痛の理学療法」..... 九州リハ大 和才 嘉昭
クリニカルカンファランス「五十肩の理学療法」..... 阪大病院 武富 由雄
座談会／第9回日本理学療法士学会をふり返って..... リハ学院 田村美枝子・他

研究と報告

脊髄損傷患者の退院後の状況..... 大阪労災病院 坂本 隆弘・他
A：都養育院 松村 秩
Q and A Q：慶応病院 藤沢 しげ子
横市大病院 大川 嗣雄
メディカルプロGRESS..... 自治医大 大井 淑雄
中伊豆リハセンター 田原 澄彦
本の紹介..... 兵庫リハセンター 山下 隆昭

編集後記

「とびら」はかなり著者自身の心情をぶちまけた感じで面白く読ませていただいた。近頃よく、「OT あるいは PT のやる ADL 評価と訓練は訓練室内のきれいな事であまり信用できない。実情に合わない」という批判を耳にする。また「とびら」の筆者の云うように「リハビリテーションは機械と建物のこけおどかしでっちも患者の役に立っていない」という囁きも頻りに耳に入る。あるいは、精神科に目を転じると「作業療法は果して治療としての効果があるのか」という現場からの声が少なからずきかれる。外国からの輸入色の濃いリハビリテーション医学、理学療法、作業療法は幾年かにわたる日本での実践経験を積んだ今、たしかに理念と技術の点で一つの岐路に立たされているように思う。

本号を通覧して非常に興味深かったのは、この「過去の実践の反省、整理」の部分と「世界の新

しい動向の紹介」とが相半ばして盛られていることである。前者に属するものとしては、「とびら」「日本の精神科作業療法を考える」であり、後者としては「脳性運動障害に対する Vojta 法の紹介とその試み」、「アメリカ精神科作業療法の変遷」そして山口素子氏の「アメリカ留学を終えて」であろう。

私達日本人は模倣の巧みな民族であり、何でも器用にとり入れ自分のものにしてしまうことに才能があるが、独創性に乏しいとは、最近はやりの日本人論の著者たちの等しく述べるところである。我々 PT、OT の世界も全くその例にもれず色々な外国の事情が流れていった。これからも流れていくことであろう。その中で「何が治療として効果があるか」を我々は手さぐりでも良い、証明していきたい。そしてこの雑誌における「研究と報告」欄の一層の充実を願う次第である。

(寺山久美子)

編集顧問

天 児 民 和
九州労災病院長
五味 重 春
府中リハビリ学院長
砂 原 茂 一
国立療養所東京病院長
津 山 直 一
東京大学教授・整形外科
(五十音順、以下同じ)

編集委員

上 田 敏
東大リハビリ部
荻 島 秀 男
都養育院リハビリ部
佐 藤 馨
神奈川リハセンター
鈴木 明子
府中リハビリ学院
谷 岡 淳
自治医科大学
田 村 美枝子
リハビリ学院
寺 山 久美子
都心障センター
松 村 秩
都養育院リハビリ部

編集同人

明 石 謙
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
大 橋 博
鎌 倉 矩 子
紀 伊 克 昌
小 林 夏 子
駒 沢 治 夫
佐 藤 剛
田 原 澄 彦
富 岡 詔 子
奈 良 勲
藤 沢 しげ子
藤 本 欽 也
前 田 守
松 本 妙 子
矢 谷 令 子
山 下 隆 昭
横 山 巖
和 才 嘉 昭

(担当 細田・松橋)